

【ポスター発表】

## 居宅介護支援事業者の介護支援専門員による訪問看護や訪問介護との チーム活動の関連要因

— 共分散構造分析による検討 —

○ 梅花女子大学 綾部貴子 (3308)

松井 妙子 (香川大学・3306)、原田 由美子 (京都女子大学・6076)

キーワード：介護支援専門員・チーム活動・関連要因

### 1. 研究目的

本研究は、居宅介護支援事業所の介護支援専門員（以下、CM）による訪問介護事業所のサービス提供責任者（以下、サ責）や訪問看護事業所の訪問看護職（訪看）とのチーム活動とその関連要因について共分散構造分析による検討を行った。

### 2. 研究の視点および方法

調査の対象は、A圏でwamnetに登録されており、無作為抽出したCM500名である。調査方法は郵送で自記式調査とした。調査期間は、平成22年10月5日～10月31日であった（有効回収率：51.0%、255名）。調査項目に関して、独立変数には「性別」「年齢」「チームアプローチや連携に関する職場外研修受講経験の有無（行政等が実施した介護支援専門員の実務研修や継続研修は除く）」を設定した。また、『人的環境要因』に関する項目として「職場内外での肯定的な人間関係」（4項目）「利用者や家族との肯定的関係」（3項目）の2因子（探索的因子分析を行い、内容妥当性、信頼性等を確認し他の学会で報告済み）を設定した。回答選択肢は「全くそう思わない（1点）」から「とてもそう思う（5点）」の5段階とした。従属変数には、『チーム活動』に関する項目として、3因子（「サ責や訪看との役割分担と相互支援」（7項目：必要時には情報共有のために時間をかけることの大切さをチームメンバーに説明する/それぞれの専門職としての役割と限界を認識し、チームにどのように貢献できるかを検討し、メンバーの役割を補う/チームとしての信頼性を高めるために、他のチームメンバーと高齢者および家族の間に形成されている信頼関係を活用する/在宅高齢者がサービスを利用することを受容する過程に合わせて、チームメンバーの役割を柔軟に変化させることを提案する/在宅高齢者の意思表示が明瞭な時期に、意思を多角的に把握し、その思いをチームメンバーと確認する/チーム活動によって在宅高齢者の理解を深め、他職種から専門的知識・技術を学び、自身のケアに活かす/チームメンバーが援助を実践する上で不安を感じた場合、不安を傾聴し、助言を行う）「サ責や訪看とのチーム活動の具体的方法」（6項目：チームという発想をもち、チームメンバーのそれぞれに割り当てられた役割を果たす/チームメンバーからの助言を全体で受け止めて、チーム一員として課題を解決する/目的や状況によって「連絡ノート」「電話」「会議」など最も望ましい連絡手段を選択する/緊急を要する場合など、介護職又は看護職が介護支援専門員の役割を代

替して直接関係機関との連携調整等を行う/ケアの具体的内容を視覚的に把握できることや、時系列で把握するなど、ノートによる情報共有のあり方を工夫する/チームメンバー間で疾患に関する知識を共有するよう働きかける）、「サ責や訪看とのチーム活動の基盤づくり」(3項目:チームメンバー間の情報共有の必要性について、在宅高齢者および家族の理解を得る/身体的、心理的、経済的負担の軽減など高齢者の利益を優先して、ケアに必要な情報をチームメンバーから積極的に収集する/チームメンバーの専門性を尊重し、対等な関係を形成する)を設定した(探索的因子分析を行い、内容妥当性、信頼性等を確認し他の学会で報告済み)。回答選択肢は「実践できていない(1点)」から「実践できている(5点)」の5段階とした。分析方法は、まず、探索的因子分析により抽出された『人的環境要因』『チーム活動』について確認的因子分析を行った。さらに、各変数間の関連については、共分散構造分析を実施しモデルの適合度および変数間の関連について確認をした。適合度指標にはGFI、AGFI、CFI、RMSEAを用いた。統計解析にはAMOS5を用いた。

### 3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、B大学臨床研究倫理審査委員会にて承認を得て実施した。対象者に、研究の趣旨や匿名性の確保、データの管理方法を文書で説明した。

### 4. 研究結果

確認的因子分析の結果、『人的環境要因』のモデルの適合度は、 $\chi^2(df)=11.796(13)$ 、GFI=.987、AGFI=.972、CFI=1.000、RMSEA=.000であった。各因子から各項目(観測変数)へのパス係数は.57~.83、因子間の相関係数は.29であった。『チーム活動』のモデルの適合度は、 $\chi^2(df)=211.458(101)$ 、GFI=.903、AGFI=.870、CFI=.953、RMSEA=.066であった。各因子から各項目(観測変数)へのパス係数は.52~.92、因子間の相関係数は.69~.82であった。次に、変数間の関連を検証した結果、モデルの適合度は、 $\chi^2(df)=52.147(18)$ 、GFI=.952、AGFI=.905、CFI=.930、RMSEA=.086であった。『チーム活動』に対し、「チームアプローチや連携に関する研修受講の有無」が1%水準、「職場内外での肯定的な人間関係」「利用者や家族との肯定的な関係」が0.1%水準でそれぞれ有意な関連を示した。

### 5. 考察

利用者や家族と肯定的な関係であることは、利用者の情報収集や共有化が可能となり、利用者に対するチーム活動を通しての介入が行いやすくなることから有意差がみられたと考える。職場内外での肯定的な人間関係であることやチームアプローチや連携に関する研修を受講することにより、スーパービジョンやコンサルテーションを受ける機会となり、介護支援専門員がチーム活動を展開する場面の際にとまどうことなく円滑に進めていくことが可能となり、自身のチーム活動の実践力の向上にもつながることから有意差がみられたと考える。すなわち、CMがサ責や訪看とのチーム活動を促進するには、利用者や家族との良好な関係、職場内外での良好な人間関係、チームアプローチに関する研修を受けることの必要性が示された。